

図書だより

〈第7号〉

昭和57年9月1日

呉工業高等専門学校
図書委員会

まえがき

図書主任 大林 潤

日本の社会も物質的にかなり富裕になったようだ。本の世界もそのようだ。毎月出版されて出てくる膨大な本の数々を目の前にして、学生諸君はどんな反応を示すと思う？

その一つは、拒否する方向だろうか。あふれるほどの本をかかえて、全くへきえきしてしまい、「モウ、ヤメタ」とばかりに読むことをやめてしまう。活字を追いつながら一字一句読んでいくうちに、人はいつのまにか考えるようになるのだが、読むことをやめてしまうから考えることもなくなる。それに加えて、見て、聞いて、タノシマセル視聴覚映像文化が急速に普及したのだから、皆そっちの方向へ走る。自然のなりゆきだからと肯定していると、「読み、書き、考える」能力の薄い人間が大勢出現するような結果となる。

又、その一つは、すべて受容する方向だろうか。いくら本が出ようが気にもとめない。むしろ、新しい魅力的な本が次々に登場するのを快く待ち受ける。本の方も読者の志向をよく把握していて、時間をかけて「読ませる本」から、軽く「見る本」へとみごとに变身していく。人は、今月の、今週の新刊書つてものを争って追っかけて、パラパラとめくり、総体としてはベストセラーズなるものが決まる。精神文化が盛大に繁榮しているようにみえて、実は物質の多量なる浪費に参画しているのであり、個人的にいえば、過剰な情報化社会の中で、一つの情報をとらえただけのことになってしまっている。

ふりかえってみよう。本は何のために読むのだろうか。根本は「読み」＝「ヨミ」ではあるまいか。広辞苑をひもとくと、「読み」は「転じて、物事の真相やなりゆき、人の心中などに対する洞察力」とある。そう、結局、本を読めば、「ヨミ」の力がつくわけだ。それならば、そういう根本的価値にふさわしいものをいくつか選んで、くりかえし読むことが肝要になるのだが。

図書アンケートを を読んで

3A 高木 弘子

正直なところ、私もあまり図書室に行かない。時に、授業とか調べものとかで行くくらいである。行く度に思う。あれもこれも読みたい、よし、今度借りに来よう、と。そこで借りないのがいけないのかもしれない。しかし、今日はあの宿題がある、明日はあれをやらなきゃいけない、じゃあ次にしよう、ということになる。考えてみるといつもそうだった。私とて、あれだけの図書を利用しないのはもったいないと、焦りを感じることもある。実際に一つ一つ図書の背を見て行くと、何かしら興味を引かれるものに必ず出会う。もう少し暇になったら読もう、そう思い続けてきた。

と、そういう私が、前回のアンケート調査の結果に対して言い得る言葉はない。自分の心をのぞいてみよう。なぜ読まないのか……。忙しいから？面倒だから？おもしろくないから？本についてどんな印象を持っているのか……。難しい？堅苦しい？手軽でない？

『食わず嫌い』という言葉がある。読書も同じことだと思う。図書には、文学書や専門書ばかりでなく、趣味関係のものや、SF・怪奇小説などいろいろある。数えきれない程多くの種類がある。その中から自分にかなったものを探して読むと、きっと読書が好きになると思う。

私達にとって図書が何であるか……。まさか意味のないもの、とは思わないだろう？辞書や専門書などは勉強に不可欠である。文学書などは、読んで感動したことのない人、もしくは愛読書を持たない人は、読書はつまらないと思うかもしれない。図書が何であるか……。その答えは省こう。人それぞれに違った意味を持つだろうから。

しかし、なぜ教養書や文学書を読む人が少ないんだろう？ああいっただものは「心の糧」になり得るのに。専門書や趣味関係の図書は、概して知識しか教えてくれないのに。そういうものを読むと、得るものがあつたとはっきりわかる。読むのに費やした時間を無駄とは思わないだろう。しかし、それだけでは少し寂しいと思わない？多勢の色々な経験や考えを知りたいと思わない？そしてたまには、一見何の役にも立たないような喜劇なども読んでみよう。思わぬ拾いものをする

かもしれない。読書は楽しいことでもある。

話は一足飛びに飛んで、あなたにとって一番大切なことは何？やりたいことは何？なんとなく止められないものは何？

何かを見つけて、その目標に向って突き進んでいくこと……。誰もが望んでいることじゃないだろうか。何かやりたいけど適当なものが見つからない。仕方ないから遊んでしまう。中途半端な生活に自己嫌悪を感じる。そんな人が案外多いんじゃないかと思う。

そんな人は何でもやってみるといい。そのうち何か見つかるだろう。そうすると他のことにもやる気が出てくる。勉強したくなる。毎日の生活が充実し、張り合いが出てくる。

そこで役立つのが図書室だ。まさしく絶好の場所。利用すればただで何でも知ることができる。誰もが認めること。

幸いにも本校図書室には多くの蔵書があり、しかもバラエティーに富んでいる。もし読みたい本がなければ、図書室の職員や図書委員の教官に言えば、たいいていのは買っていただけ。

図書関係の仕事は大変だろうと思う。「読書離れ」が言われて久しいから。図書に携わっている諸教職員がされていること、めざしているものが何か、わかるような気がする。私も似通ったことをやっているから。

と、まあ、よくもこんなに偉そうなことを書いてしまったものだ。それも私がわざわざ言うまでもないことを。生意気なこと書きましてすみません。許して下さい。

いろいろ考えてきたわけだけど、読めない筈はないんだ。「時間をつくるもの」読みたい思いは十分。さあ、読むぞ！

「ジェニイ」

(ポール・ギャリコ著)

3M 小田 浩

「ジェニイ」というこの作品名、実は雌猫の名前なのです。そして彼女「ジェニイ」は作者の理想の女性像を託した猫でもあるのです。それは作品中のジェニイの描写がとても優しく、愛情溢れるものであることから容易に想像することができます。

物語はジェニイと恋人ピーターの冒険と恋を中心に展開します。ピーターという雄猫は本来人間だったの

ですが、ある日突然変身してしまったのです。作者はジェニイをこのピーターの目から描き出してゆきます。故にピーターの心情と作者の心情が密接に関係合っており非常にリアルで繊細な表現がジェニイに対して向けられています。これによりピーターのジェニイへの思惑の変化や冒険を通しての成長ぶりも明確に捕えることができます。

当初、猫の世界に溶け込めず、悪漢猫デンプシイに痛めつけられたピーターを優しく介抱してくれたのがジェニイであり、その後、猫の世界の掟を教えたのもジェニイでした。ピーターにとってみれば命の恩人でもあるわけです。

しかしこの恋人達にも人間に対する感情には大きな隔たりがありました。それはジェニイの徹底的な人間不信によるものです。ジェニイの主張とピーターの主張が衝突する場面は緊迫感に富んでおり、私達に厳しい課題を次々と投げ掛けてきます。確かに私達人間は身勝手ですし、自己中心的で傲慢です。これは事実ですからジェニイの意見には大いに反省させられます。狭い見方を捨て、もっと広い視野で物事を見つめ、全ての者と共存することにより幸福が生まれるのですから。しかしジェニイが人間の欠点のみを見過ぎてきた事も、また事実で、その点では人間を誤って理解していることにもなります。この誤解が本来人間であったピーターを愛することにより消えてゆき、より素晴らしいジェニイへと変わってゆくのです。そして、そんなジェニイにピーターは、それまでの友情から今度は愛情を向けてゆきます。二匹(?)の間にある愛情は互いを拘束してしまうものでなく、刻々と大きく成長し崇高なものへと達するものです。これが愛情の真理でありますし、そこに大きな意義と価値を見出すこともできます。理想としては、あらゆる事物よりも愛情を優先させるべきでしょう。でも悲しいことに現在は精神的な価値よりも物質的な価値を優先させる傾向があります。この時期に私達はもう一度原点に立ち返って考え直す必要がありそうです。

ところでこの作品を際立たせているものに、作者の鋭い観察力と脇役の特徴づけがあり、これらにより一層、ジェニイとピーター、そして背景がリアリティを持ったものになっている点は見落とせません。

まず観察力の鋭さについてですが、文句なく一級のものであります。猫の日常的な動作の一挙一動が手に取る様にわかります。この鋭い観察力により空想、幻想的な物語も実在的な説得力を持って迫って来ます。これは

作者の猫への親愛ぶりを示す最も顕著な部分です。猫への深い理解と同情が作品を生みだした基盤となったのでしょう。猫好きの読者なら、これだけで充分物語を楽しむことができます。

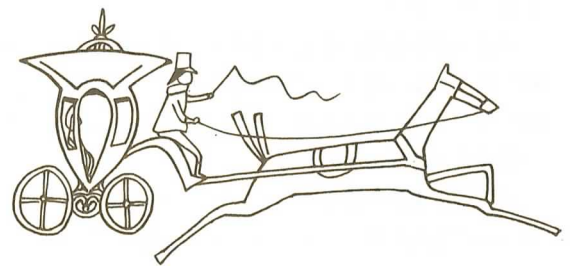
それからジェニイとピーターを巡る猫達の魅力もまた作品の質を高めています。殊にピーターの宿敵であるデンプシイは実に憎々しげに描写されており、それがピーターの対照的な個性を引き立てています。このコントラストはとて鮮やかなものです。両者のジェニイを巡っての闘争は激しく、勇ましく、悲しいもので、物語中最高の盛りあがり、ここにあります。

次から次に登場する様々な猫達も物語を華麗に彩っています。そしてここにも作者の観察力が十二分に生かされて、それぞれの猫が躍動感に溢れています。

この様に物語は色々な要素が凝縮され、単なる恋愛ものでなく、幅広い主張と説得力を持った人間ドラマなのです。そこには現在の小説、物語の大きな位置を占める後味の悪い、暴力描写も性的描写もありません。その事が逆に現代に於いて、この物語の価値を高めるものとなっているのは、興味深いところです。

人を信じてことができなくなった時、人間が嫌になった時、この物語を読むことです。そこには、作者ポール・ギャリコが愛情を込めて描いたジェニイ、ピーター、その他多くの猫達が人間の素晴らしさを教えてくれるでしょうし、大きな感動があるはずですよ。

読後、あなたは街角に、道端に、公園に、ジェニイやピーターを見ることでしょ。



とっておきの本の世界

2A Co and Ko

やたらムズかしい事ばかり書きたてた「知識書」を

ボクはあまり好みません。読むのにとっても疲れるからです。けれど本を読むのは大好きなのです。

「知性って、スグ眠くなるのヨネ」

TVのCMじゃないが、眠れない夜、読書なるものを始めれば、何の抵抗もなく眠れるから——。

こんなボクが、眠るのも忘れて、一晩で読破した、とっておきの本を紹介したいと思います。「現実直視書」「厭世論文」「専門書」etc. に何らかの欠陥があると常々思っている人にぴったりの本となるでしょう。そうでない人にとっても、きっと、ほのぼのとした気分ひたれる時をつくる本になるでしょう。

「ぼっぺん先生の日曜日」(舟崎克彦著)

舟崎克彦氏の描き出す世界の面白さは、このうえないと思うのです。しっかりした科学知識を基盤として書かれている為、童話とは思えないほどのリアルさがあり、ぼっぺん先生の人柄のユニークさ、ユーモアたっぷりの文体。読んでいくうちに、どんどん本の世界に引きずられそうな気がします。

ぼっぺん先生は、シリーズもので、この他にも、何かあるのですが、ボクは、「ぼっぺん先生の日曜日」が一番だと思ったのです。

とても奇妙な話で、でもちっとも異和感がないのです。彼が、幼い頃買ってもらったなぞなぞ絵本の中に入れてしまい、なぞなぞが解けないと次のページに進めない、つまり、本から出られなくなってしまうといった話。もちろんラストにはちゃんと本から抜け出されましたけれど。

幼稚でばかみたいななぞなぞも、大学教授の彼には難しかったようです。子供の頃、わかった問題でも、頭がかたくなった大人達にはちよいとわからなかったりするものなんです。

ぼっぺん先生を追いかけて、ページをめくるごとに、ぼっぺん先生といっしょになぞなぞを解いていくうちに、なぜか幼い頃に戻れそうな気がしました……。

また、ボクはぼっぺん先生が大変好きなのです。アリの一匹、花の一つにも、やさしく接することのできる彼が、とても好きなのです。そんなぼっぺん先生だからこそ、不思議な体験をしても、ちっとも変じゃないんですよ。そして作者自身も、彼に深い深い愛情を注いでるのが感じられて、ちょっとだけ、うらやましいナァなんて思ったりもしました。

他にボクが読んだのは(すっかりコッてしまったの

です。)「ぼっぺん先生と帰らずの沼」「ぼっぺん先生と笑うカモメ号」「ぼっぺん先生とどろの王子」「ぼっぺん先生の動物事典」です。どれもとても面白いものでした。

童話なんて——と思う人もいるかも知れませんが、一度読んでみるだけの価値はあるとボクは思うのです。幼い頃見そこなった夢、忘れてしまったハズの夢が、もう一度見れるかも知れません。

童話は子供達だけの本じゃないのですヨ。



図書だよりを読んで

教務主事 糸島 寛典

本校の図書館は創立以来、各教官の努力により多数の書物が集められ、立派な図書館の整備により利用され易い形となった。これにより図書を愛する学生諸君にとって非常に勉学あるいは知識教養の援けとなっているはずである。

しかしながら今日“図書だより”のアンケートを見るとほとんど利用しない学生が全体の41.8%、利用しても昼休みが49.5%、借り出して読んでいる学生が14.9%（昭和43年は41.3%）と低下しており、それでは自分で図書を買っているかと云うと学生の大半が年間1～2冊で他は1冊も買わない現状で、友人の本を読んでいるかと云うと1日のうち30分以下しか読書しない者が66%を占めている。これは真に困ったもので、社会的地位の向上は読んだ書物の量に比例することを知らないのだろうか。

かかる現状では将来が思いやられるので、毎週のカ

リキュラムの間に読書時間を設けることも考慮しなければならぬのではないかと反省している。

アンケート結果に対する図書委員会の希望の記事を学生は充分読んでほしい。

読む図書から見る図書への学生の興味の移動は学校創立当時から識者の間では考えられた所であって、テレビの普及と共に、いわゆるテレビっ子が生じ、今日のように図書ばなれが生ずることは当時予見できたことであったが、学校の先生方は一般に書物の好きな方がほとんどで、それにより多くの知識を吸収されたわけだから、出来るだけ多くの図書を努力して購入されたことは充分理解できる。

私が中学校時代に読んだ書物の中に父親として息子に何を残すべきかと云う問いの中に「万巻の書籍を残すと云えども、息子は一読だになさねば残せる効果無し」とあった。昔から「只でもらった本は読まぬ」と云う言葉がある。真実に読みたいと思って買った本でなければ、その内読む機会があると思ううちに読まないと云う人間の真理をついたものだ。眼前に余りに多くの図書があれば眼移りして読みたくなくなることも事実だ。

今後とも学生の図書ばなれの傾向は続くと思われるので、図書委員会としても視聴覚関係を力に向けて欲しい。先進国の図書館は今その傾向にある。



私の読んだ本

一般科目 田辺 達雄

「青春」という言葉はテレビ番組や本などの題名としては実に多く見られる。逆に言えば私たちがそれだけ青春に対して憧憬やなつかしさを抱いているのである。人生において最も華やかで、無限の可能性へ挑戦しようとする時期——私はジョウゼフ・コンラッドが著わした「青春」を読んで、青春時代の一端をこう受

けとっている。この作品は短篇であるが、明治以来、多くの翻訳者に紹介されて人気がある。あらずじは単純である。

二十才の主人公が二等航海士となって初めて航海することになる。乗る船はジュディア号という老朽化した帆船である。英国からバンコクまで石炭を運ぶのであるが、老朽のゆえに、嵐に遭っては破壊して危うく沈没しそうになって引き返し、水漏れが激しくなつてはまたもどり、完全にドックで修理をすますまでは航海しないと乗組員たちが拒否してはまたもどる、というわけで、さんざん修理に手間取った末にやっと順調に航海を始める。ところが途中で積荷の石炭が自然発火を起して乗組員は不安を抱く。はじめは臭いだけだったがやがて煙が現われ、それが日を追うにつれて次第に勢いを増してきて、遂にバンコクを目前にしたとき船は爆発して炎上してしまう。結局、乗組員は全員、着のみ着のままかろうじて「東洋」へたどりつく。

この作品は「海」を背景にした、いわゆる海洋文学作品と呼ばれる。コンラッドは他にも映画化された「ロード・ジム」や「台風」などを発表し、英国を代表する海洋作家と言われている。彼がこうした海を扱った多くの作品を発表した理由として、波乱に満ちた彼の青春時代の影響が考えられる。

彼は一八五八年、当時帝政ロシアの支配下にあったポーランドに生まれた。父親は祖国独立運動の中心人物の一人だったが、彼が生まれて後しばらくして捕えられ、ロシア北部に流刑になる。母親は病弱であったが気丈夫で、幼いコンラッドを連れて、敢えて夫のもとで刑を共にすることを願って許される。短い期間ではあったが、こうして苦しい中にささやかな一家の幸せがあった。しかし、酷寒のこの流刑地は結果的には母親の死期を早めることになり、コンラッドが九才の時に病死する。それから三年後には父親も死亡して、彼は母方の叔父のもとで養育される。この頃から彼は海に強い関心を抱き始めて、一八七四年には祖母や叔父の反対を押しきって遂に単身マルセーユに船員を志望して新天地を求める。それは彼が十七才の時であった。その後の三年間の彼の青春時代は、中南米や西インド諸島を中心に武器弾薬の密輸船に乗って命がけの冒険をやつてのけるかと思えば、マルセーユでは放蕩三昧に明け暮れて多額の借金をつくって親がわりの叔父を嘆き悲しませ、拳句には恋愛問題のこじれから自殺未遂までも起している。

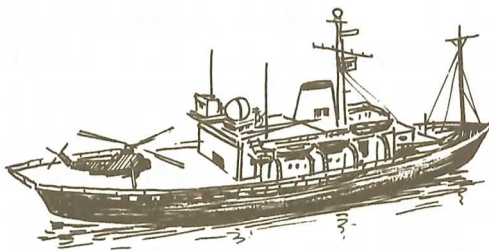
一八七八年、彼は初めて英国船に乗り、その時に初

めて英語も耳にしたが、その二年後には英国の二等航海士の資格試験に合格、一八八六年には船長資格も見事獲得して実際に英国船でレッキとした船長として活躍している。身寄りも知人もいない異国で不慣れなことを克服し、遂に船員の最高の資格までも掌中におさめるには、彼の不屈の精神力は勿論であるが、彼の非凡な語学力は驚異的なものがある。後年、海上生活を離れて作家生活に入るが、そこでも英国文学界を代表する作家の一人になっている。

短篇「青春」には、彼が実際に航海士となった時の経験が織りこまれていられると言われる。作中の主人公はジュディア号に乗船した時の様子を次のように語っている。

「その船尾の、大きな字で船名を書いた下に、はげた渦型模様のいっばいある紋章みたいなものが描いてあって、下の方に『^{ひんが}覽れて^{のうや}後已む』という motto が刻んであった。そいつにおれがひどく空想を刺激されたのを思い出すよ。その言葉には夢があったんだ。なにやら遠い昔のことをいつくしむ気持ちにさせるようなもの、おれの青春に訴えかけるようなものが！」

初めて体験することばかりの航海で、主人公がひたすら青春を求め、『覽れて後已む』の motto に魅かれ、はるか海の彼方の幻想的な東洋への大きな期待を膨らませる。暗黒の洋上に真赤に炎上するジュディア号を描くクライマックスの場面では、主人公は目もくらむばかりの青春の炎を見出している。そして我々読者に青春の意識を鮮烈に駆りたててくれる。物語自体は簡単であるが、こうした作者の生いたちを考えつつ読むと味わいもより一層深まり、海の不思議な魅力に引きこまれていくのである。



「ファティマ・第3の秘密」

機械工学科 赤尾 不二雄

緊迫する今日の中東情勢や、ごく最近のフォークラ

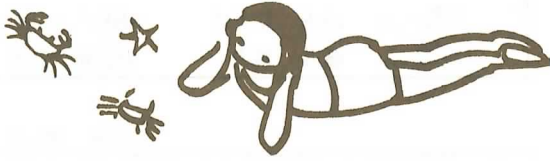
ンド島における局地戦の様相が、毎日のようにマスコミという安全フィルタを通して茶の間に報道され、核兵器の現実使用に対する脅威と危惧感が無意識のうちに徐々にわたしたちの心の中に蓄積されていく現在、それに呼応するかのようには、欧米各地においては、以前にも増して反核の気運が高揚し、平和を切望する人々の声は、例えば、国連を通してアピールされている。しかし、米ソの核に対する強引な動向の前にはそのような行動はいかにも微力である感は否めず、「もしかしたら」という不安がいつもつきまとっている。

私がここでとりあげた、本のタイトルともなっている「ファティマ・第3の秘密」とはまさしく、人類が最も恐れている核兵器行使による自滅的とも言うべき、第三次世界大戦の勃発に対する予言である。「予言」と言えば、そこから受けるイメージは、いかにも非科学的であり、私にとってはただの「よまいごと」としか感じられない。しかし、この本はそれがそうとは明確に言い切れない事実を読者に示し、「予言」をあたかも「可能性の高い推測」として錯覚させるよう巧みに構成されている。たとえば、第1、第2の予言は、簡単に言えば、それぞれ第一次世界大戦の終了時期および第二次世界大戦の勃発と核兵器の使用に関するものであり、これらの予言がことごとく的中していると述べている。また、つい最近、昭和56年5月5日付けの毎日新聞に掲載された北フランスでのハイジャック事件において、犯人がこの「ファティマ・第3の秘密」の公表をローマ法王庁に要求した事実を示し、いかにもその予言がかなりの重要性を有しているかのように記し、さらに加えて、その直後に起きたローマ法王のそ撃事件が、実は、このハイジャック事件によって民衆の心の中に生じたこの「ファティマ・第3の秘密」に対する好奇心とも言うべきものを消し去るための故意の事件であったとの著者の推測も交じえてことさらにその信憑性を強調している。

このように、この種の本は読者の好奇心を無理にでもそそるよう、事実が著者の意図によって歪んで書かれているため、興味本位である場合が多く、いわゆる良書という部類には属さないと思う。しかし、平和な日常生活の中で、平和であることが肌で感じられなくなっている私にとって、この本が私の平和観を十分に刺激した感はある。

なお、最後にこの「ファティマ・第3の秘密」によれば、人類滅亡の危機はあと数十年後の今世紀末におとずれるとされており、これは以前に話題となった「ノ

ストラダムスの予言」ともよく符合していることを付記しておく。果して「予言」が「現実」になるかは……。



「日本への自叙伝」

(E. O. ライシャワー)

電気工学科 山崎 勉

この本は日本人のために特別に書かれた本である。日本がたどった歴史やその近代化の過程、そして最近の日米関係等の理解の一助となるように日本(N. H. K)で企画された。著者ライシャワー氏は、日本で生まれ幼い頃を日本ですごしている。アメリカに帰り、日本研究の学者となった人である。また、戦後、60年代の前半駐日米大使として活躍された事でもよく知られている。学者である著者は、日本に関する学術論文を数多く著わしている(最近では、アメリカでベストセラーになった『ザ・ジャパニーズ』がある)が、この本はそれらとはまったく違った形式で、日本論を展開している。この点、非常に読みやすく親しみやすい本である。

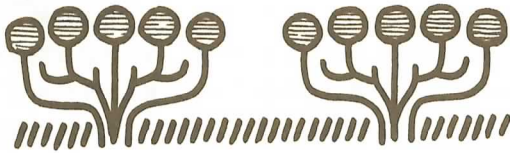
本書の内容は、題にもあるように著者の経歴を書いた自叙伝である。しかし、読み進むにつれて著者がいかに日本と大きなかかわりを持ち、現在の日本にとっていかに大きな影響を与えているかが感じられ、非常に興味深い本である事に気がつく。例えば、太平洋戦争時の暗号解読や戦後日本の処理方法など。

日本とアメリカの両方に対して第三者的立場に立つ著者(自称)は、日本について次のように言っている。「日本には民主主義が十分根づいている事を確信していた」この事はこの本を読んで初めて気づく点である。そして、日本人の弱点について、「日本人が日本は他に見られないユニークな国であるという考えをもっている」事を挙げている。その反面、日本の若者たちが(60年代の若者たちを指すと考えられる)、日本のためだけでなく広く社会または世界のために考える方向にある事を

心から喜んでいる。そして何よりも「相互理解」の重要性を述べている。これこそが、今日の日米関係を発展させた最も重要な要素であった事を歴史的事実として示し、現在問題となっている日米貿易摩擦の解決の鍵である事を暗示している。また、将来の日本はこの相互理解を日米間のみならず、世界の各国との間にも発展させ、国際社会の発展に大きな役割を果たすべきであり、また日本はこれが可能な国であると考えているようである。この点について、我々はもっと考える必要があると思う。

相互理解のためには各々が相手を十分知る必要があると同時に自分自身についても正しく理解する事が必要である。この点について本文の中で次のようにも言っている。「歴史は人間経験についての知識の源泉である」と。現時点を理解するには、ここまで発展した歴史を知る事が非常に重要である事を歴史学者の立場から我々に教えている。歴史は単に記憶するものではなく、その中から何かを学びとるものである。この事を本書は教えてくれた。また、日本人以外の人から見た「日本」を知る事も、おもしろいと思う。





学生にすすめる図書

図書委員会では、アンケート調査の結果を検討し、今後もあらゆる機会をとらえて、諸君に読書の必要性を訴えていくことにした。食事をとって肉体の健康を保つように、書物を読んで心の健康を維持することに、日々努めようではないか。このたび教官の方々に一般教養的な図書を推選していただくことにした。良書、適書を求めて、模索している人があるとしたら、あるいはその手がかりになるかもしれない。他高専では「学生必読図書100選」と銘うって読書の道しるべをつくっている所もあるが、書物が洪水のように氾濫している現今の社会をみると、そういうものを本校でも選んで紹介する時期に来ていると思われる。

(佐藤 重夫)

書名	著者名	出版社名
日本への自叙伝	E.O. ライシャワー	日本放送出版協会
日本の美を求めて (風土と伝統)	立原 正秋 対談	角川書店
私のスイス	犬養 道子	中央公論社
マッカーサー	袖井 林二郎, 福島 寿郎	日本放送出版協会
星の物理	北村 正利	東京大学出版会
山陰山陽の古寺	太田 博太郎	集英社 (日本古寺美術全集19)

(大林 潤)

書名	著者名	出版社名
心	夏目 漱石	岩波文庫ほか

(柘本 紘二)

書名	著者名	出版社名
敦煌	井上 靖	講談社(ロマン・ブックス)
青玉獅子香炉	陳 舜臣	文芸春秋社
県民性	祖父江 孝男	中公新書
生活文化の発生(上・下)	ユリウス・リップス著 大林 太良 訳	角川新書

(岩根 三邦)

書名	著者名	出版社名
オイディプス王	ソフォクレス著 高津 春繁 訳	人文書院
饗宴(シュボシオン)	プラトン 著 森 進一 訳	新潮社
禅に生きる	澤木 興道	誠信書房
ギリシア悲劇 —その人間観と現代—	山内 登美雄	(NHKブックス103)
ギリシアの古典 —よく生きるための知恵—	藤井 義夫	(中公新書102)

(高城 博昭)

書名	著者名	出版社名
モンテ・クリスト伯	アレクサンドル・デュマ	岩波文庫ほか
罪と罰	ドストエフスキー	岩波文庫ほか
職業としての学問	マックス・ウェーバー	岩波文庫ほか
魯迅集(阿Q正伝ほか)	丸山 昇 編	平凡社ほか
プロテスタンティズムの倫理 と資本主義の精神(上・下)	マックス・ウェーバー	岩波文庫ほか
資本主義経済の歩み (上・下)	レオ・ヒューバーマン	岩波新書ほか

(兼本 富夫)

書名	著者名	出版社名
罪と罰	ドストエフスキー	岩波文庫
クラルテ	アンリ・バルビュス	岩波文庫
ベスト	A.カミュ	新潮文庫
人間の絆	S.モーム	旺文社文庫
人間の条件	五味川 純平	河出書房新社

(小山 通栄)

書名	著者名	出版社名
不思議の国のトムキンス	G. ガモフ	白揚社
原子の国	〃	〃

(茶木 正吉)

書名	著者名	出版社名
水はみんなのもの	A.S.BEHRMAN 山県 登 訳	東京化学同人
汚染物質	長崎 誠三	新日本新書
水の世界	アルブゴリツ 著 堀江 豊 訳	講談社(ブルーバックス)
遺伝毒物	西岡 一	〃
ppmへの挑戦	大八木 義彦	〃

(堀 武夫)

書名	著者名	出版社名
精神力のトレーニング	太田 哲男	講談社
スポーツ馬鹿	山田 宏臣	同上
プロ野球を10倍 楽しく見る本	江本 孟	ベストセラーズ
風景との対話	東山 魁夷	新潮社
怠けものの思想	笹川 巖	PHP研究所

(白川 洋二)

書名	著者名	出版社名
輝ける碧き空の下で	北 杜夫	新潮社
誤解(Misunderstanding)	E. ウィルキンソン 徳岡 孝夫 訳	中央公論
発想の技術・創造の技術	F. F. マウザー 川勝 久	PHP研究所
「縮み」志向の日本人	季御 寧	学生社
茶の間のコンピューター	相磯 秀夫 他	朝日新聞社

(田邊 達雄)

書名	著者名	出版社名
英語のことわざ	秋本 弘介	創元社
ロックの心	アラン・ローゼン 福田 昇八 著	大修館書店
漱石のロンドン	角野 喜六	荒竹出版
総解英文法	高梨 健吉	美誠社
新活用英文法	松川 昇太郎	研究社

(石井 淳二)

書名	著者名	出版社名
日本人と英米人	ジェームズ・カーナップ 中野 道雄	大修館書店
中世を旅する人びと	阿部 謹也	平凡社

(川尻 武信)

書名	著者名	出版社名
赤と黒	スタンダール	岩波文庫
月は沈みぬ	スタインベック	新潮文庫
黒い雨	井伏 鱒二	〃
しぐさの日本文化	多田 道太郎	角川文庫
英語の話しかた	國弘 正雄	サイマル出版会

(周藤 剛士)

書名	著者名	出版社名
日本の黒い霧	松本 清張	文芸春秋
殺される側の論理	本多 勝一	すずさわ書店
不屈	トアン・N	新日本出版社
「殺すな」から	小田 実	筑摩書房
ジャン・クリストフ	ロマン・ロラン	河出書房新社

(久保田 勲)

書名	著者名	出版社名
雑誌プレジデント (57年6月号)		プレジデント社
ジャン・パン・アズ・ シンバーワン	エズラ・F・ヴォーゲル	TBSブリタニカ
エンジンの話	熊谷 清一郎	岩波新書
日本の技術は何故優秀か	飛岡 健	エール出版社

(野原 稔)

書名	著者名	出版社名
日本の内閣I	白鳥 令	新評論
福祉国家の悩み	ヘドバーク 川崎 一彦 著 訳	サイマル出版

(藤田 幸史)

書名	著者名	出版社名
アジモフ博士の地球・惑星・宇宙	I. アジモフ 著 小隅 黎 訳	社会思想社
最新科学技術のことがわかる本	尾崎 正直	日本実業出版社
私の創造論	湯川 秀樹	小学館
殺物メジャー	石川 博友	岩波書店
遺伝子工学の現状と未来	アメリカ合衆国OTA編	家の光協会

(赤尾 不二雄)

書名	著者名	出版社名
ドキュメント校原病	小坂 橋二郎	サンマーク出版
日本軍人の死生観	長嶺 秀雄	原書房
アンデスの謎	R. シュタル 著 島津 訳	角川書店
住んでみたインド	中村 研二	サイマル出版会
田中角栄破れたり	陣内 建	講談社

(河野 正来)

書名	著者名	出版社名
プルトニウムの恐怖	高木 仁三郎	岩波新書
匠の時代	内橋 克人	講談社
日本人とユダヤ人	イザヤ・ベンダサン	角川文庫ほか

(脇所 広司)

書名	著者名	出版社名
日本人その思想と行動	九州大学公開講座委員会	九州大学出版会
技術強国・日本の戦略	森谷 正規	PHP研究所
技術新時代	朝日新聞経済部	朝日新聞社
発想の現場	柳田 邦男 他	講談社

(若宮 正明)

書名	著者名	出版社名
ラジコン技術の製作	増永 清一	誠文堂新光社
オフィス・ロボット時代	和多田 作一郎	工業調査会

(廣光 清次郎)

書名	著者名	出版社名
The Third Wave	A. Toffler	W. Morrow Co.
第三の波	徳山三郎 監修	日本放送出版協会

(山崎 勉)

書名	著者名	出版社名
ジャパン・ショック	リヒャルト・ガウル	日本放送出版協会
The Grapes of Wrath	John Steinbeck	Penguin Books

(石井 義明)

書名	著者名	出版社名
梅干と日本刀	樋口 清之	小学館
同上続編	同上	同上
入江熟の秘密	入江 伸	同上
しょせんこの世は色か食か	三浦 朱門	同上
奇跡の記憶術	藤本 憲幸	同上
スプーン一杯の幸せ	落合 恵子	同上
日本を見なおす	鯖田 豊之	講談社
官僚	藤原 弘達	同上

(丸上 晴朗)

書名	著者名	出版社名
中国の歌ごえ	スメドレー	みすず書房
己れ無き日々	退職婦人教職員 連絡協議会	岡山県教職員組合
宮沢賢治	佐藤 隆房	富山房
新修良寛	東郷 豊治	東京創元新社
松川裁判	広津 和郎	中央公論社

(岡本 二郎)

書名	著者名	出版社名
世紀末の街角	海野 弘	中公新書620
イスラム世界 —その歴史と文化—		世界思想社
現代の土地神話	華山 謙	朝日選書183
大江戸の文化	西山 松之助	新NHK市民大学叢書9



編集後記

図書だより第6号に示された学生の図書離れに対する対策を図書委員会で検討し、その結果、今年度は、各教官方に数冊の図書を推選していただき、その一覧表を、学生諸君に今秋の読書の参考にして貰おうということになりました。各教官方にはご協力有難うございました。学生諸君も十分に活用されんことを願います。

また、第6号のアンケート結果の感想や、読書感想文、図書紹介等、多数の投稿をいただきました。どれもボリューム一杯の原稿で、全部を掲載することができず一部を第8号に回させていただきます。

今年度の編集委員は、大林、兼本、山崎、大西の四人が担当することになりました。よろしくお願ひします。
(兼本記)



新着図書案内

>0 総記<

共立総合コンピュータ辞典
 (日本ユニパック総合研究所 編) 共立出版
 コンピュータ図形処理 (長江 貞彦) 〃
 図書館 その本質・歴史・思潮
 (岡田 温) 丸 善
 世界図書館年表 (佐野捨一 編) 岡山理科大学
 ブリタニカ国際年鑑1982 T.B.S. ブリタニカ年鑑
 叢書文化の現在 岩 波
 2: 身体の宇宙性
 5: 老若の軸・男女の軸
 9: 美の再定義
 新釈漢文大系 明治書院
 33: 春秋左氏伝(4)
 48: 戦国策(中)
 87: 史記(7)
 書物という鏡 (色川 大吉) 大和書房
 深夜の読書 (辻井 喬) 新潮社
 図書館活用百科 (紀田順一郎) 〃
 読書の旅 (森本 哲郎) 講談社
 武士の家訓 (桑田 忠親) 旺文社
 実録裁判 疑惑・情事・謀殺 〃
 きまぐれ読書メモ (星 新一) 有楽出版
 日本の図書館1981 図書館協会

>1 哲学<

世界の聖域 講談社
 別巻1: 中国の泰山
 聖書の旅 (山本 七平) 文芸春秋
 聖書の天地 (犬養 道子) 新潮社
 若者たちよ自立をめざせ
 (ピッケン・スチュアート) 大和書房
 日本人の仏教 (増谷 文雄) 〃
 おとぎ話における悪
 (フォン・フランツ) 人文書院
 おとぎ話における影
 (〃) 〃
 遥かなり心の旅 (波場 武嗣) 講談社
 創造への勇氣 (ロロ・メイ) 誠信書房
 こころの解放 (田中 忠雄) 日本教文社
 私の青春ノート (樋口 恵子) ポプラ社

>2 歴史<

目で見る戦史 第二次世界大戦
 (A・テイラー) 新評論
 広島県史 近世1 通史3 広島県
 〃 近世2 通史6 〃
 海の都の物語 (塩野 七生) 中央公論社

岩波西洋人名辞典 増補版 岩 波
 寺田寅彦覚書 (山田 一郎) 〃
 学術用語集 地理学編 (文部省 編) 日本学術振興会
 The Times atlas of the world Times Books
 角川日本地名大辞典 41: 佐賀県 角 川
 日本の山河~天と地の旅~ 国書刊行会
 18: 和歌山
 19: 奈良
 20: 兵庫
 21: 大阪
 22: 京都
 23: 滋賀
 24: 三重
 空からみた産業景観 (浮田典良 編) 大明堂
 空からみた都市景観 (小林 博 編) 〃
 空からみた歴史景観 (矢守一彦 編) 〃
 地形図に歴史を読む1~5 〃
 (藤岡謙二郎 編) 〃
 地域科学入門1・2 (W. アイサード) 〃
 図説日本の町並み 第一法規
 1: 北海道・北東北編
 5: 中部編
 6: 東海編
 7: 近畿編
 8: 山陽編
 9: 山陰編
 12: 南九州・沖縄編
 カラコラムを越えて
 (ヤングハズバンド) 白水社
 岩壁よおはよう (長谷川恒男) 中央公論社
 生きることの意味 (高 史 明) 筑 摩
 TN君の伝記 (なだいなだ) 福音館書店
 一料理人として (志度 藤雄) 文化出版
 女ひとりのニューヨーク (須田 幸子) 講談社
 おや、旅だ (高田 宏) 新潮社
 バクダッドの金曜画家 (高橋 英彦) 〃
 ヒマラヤ巡礼 (スネルグローヴ) 白水社
 ティグリス号探検記 上・下
 (ハイエルダール) 筑 摩
 ヨーロッパ アメリカ汽車の旅
 (青木 晴夫) 講談社
 イギリス君のイギリス (杉恵 惇宏) 〃
 歴史新書 教育社
 32: 天平芸術の工房 (武者小路 稔)
 62: 鎌倉御家人 (安田 元久)
 63: 悪 党 (小泉 宜右)
 103: 佐渡金山 (田中 圭一)
 108: 鉄砲とその時代 (三鬼清一郎)
 147: 台湾総督府 (黄 昭 堂)

>3 社会科学<

日本の地域構造 大明堂
 2: 日本工業の地域構造

3：日本農業の地域構造
 4：流通、情報の地域構造
 5：人口流動の地域構造
 超長期未来予測データ集 1982年版 日本能率協会
 国際連合 世界統計年鑑1979・80 (31集) 原書房
 値段の明治大正昭和風俗史 (週刊朝日 編) 朝日新聞社
 (続) ()
 新時代のキャリアガイダンス (H・ポーロー 編) 実務教育出版
 学校進路指導 (広井 甫) 誠信書房
 講座 日本の民俗 有精堂
 別巻：民俗調査研究の基礎資料
 広島県方言辞典 (村岡浅夫 編) 南海堂
 新西洋事情 (深田 祐介) 講談社
 アメリカン・バイオレンス (R・シュレーター) 〃
 カルチュア・ショックの心理 (近藤 裕) 創元社
 家族の本 (齊藤 茂夫) 大和書房
 オフィスロボットがやってきた (T・フォレスター) ダイアモンド社
 ふだん着のニッポン経済 (J・ヒルシュマイヤー) 〃
 男たちの履歴書 (加藤 廣) 東洋経済
 死にたいあなたへ (朝倉 和泉) 中央公論社
 ニューヨークの女ともだち (なみきみどり) 集英社
 モサド、その真実 (落合 信彦) 〃
 アメリカン・ライフォロジ (塩田 長英) 新評論
 暮しの中の神さん仏さん (岩井 宏實) 文化出版
 幸福先進国フランス (秋川 陽一) 講談社
 住んでみたアメリカ (松岡 将) サイマル出版
 住んでみたモスクワ (匹田 軍次) 〃
 日本人の笑い (深作 光貞) 玉川大学出版
 いかに学ぶべきか (佐藤 忠男) 大和出版
 高校生の山河 (岩瀬 国雄) 高校生文化研究会
 日本は資本主義ではない (西山 忠範) 三笠書房
 ビラの精神 (鎌田 慧) 晶文社
 文化人類学 (祖父江孝男) 旺文社
 今日もせっせと生きている (小林 茂) 風媒社
 当世らてん・あめりか事情 (田森 良昭) P H P 研究所
 入門新書時事問題解説 教育社
 322：精密誘導
 326：円・ドル・マルク
 327：OECDと先進国経済
 生きがいの探究 (返田 建) 大日本図書
 平和憲法を疑う (勝田吉太郎) 講談社

>4 自然科学<

科学技術政策史年表 (日本科学者会議 編) 大月書店
 科学・技術者のための英文ポリッシュアップ (R・ブランド) 培風館
 プロジェクト物理 4：光と電磁気 コロナ社
 力学緒論 (庄司 彦六) 内田老鶴圃新社
 PAC化学 (野田四郎 等) 三共出版
 地球科学入門シリーズ 9：宇宙科学入門 共立出版
 学術用語集 海洋学編 (文部省 編) 日本学術振興会
 大地の雲映 (眞鍋 大覚) 中日新聞本社
 気候と人間シリーズ 朝倉
 1：世界の気候、日本の気候
 2：気候変化、長期予報
 3：風土論、生気候
 4：気候と文明、気候と歴史
 日本の野生植物 草本2 離弁花類 (佐竹義輔 等編) 平凡社
 本能の研究 (N・ティンバーゲン) 三共出版
 メロニー図解医学辞典 (B・J・メロニー等) 南江堂
 ベル・リア戦火の中の犬 (シーラ・バンフォード) 評論社
 地球はふるえる (根本 順吉) 科学の本
 ホスピス (ビクター・ローズマリー・ゾルザ) 家の光協会
 生命ある限り (キューブラー・ロス) 産業図書
 がんとビタミンC (L・ポーリング、E・キャメロン) 共立出版
 明日の医学 ホメオスタシスの限界 (伊藤 眞次) 〃
 こころの医学 (荻野 恒一) サイエンス社
 悪用される科学 (生越 忠) 三一書房
 生命産業時代 日本経済新聞社
 これが地震雲だ (鍵田忠三郎) 中国新聞本社
 自然読本夢・眠り 河出書房
 星のない夜に楽しむ本 (齊田 博) 誠文堂
 青いケシの国 (F. キングドン=ウォード) 白水社

>5 工学<

大学講座 土木工学11：橋梁工学 第2版 共立出版
 機械工学講座 18：伝熱工学 〃
 弾・塑性新論 (横道 英雄) 技報堂
 プレビーム (プレビーム振興会 編) 〃
 新体系土木工学 (土木学会 編) 〃
 21：水理学の基礎
 90：水処理
 樋門・樋管の設計と考え方 (中沢武仁 等) 鹿島出版会
 低層集合住宅を考える 3 (都市住宅編集部 編) 〃
 わかりやすい振動の知識 (宮田 利雄) 〃

低層集合住宅を考える 4
 (都市住宅編集部 編) 鹿島出版会
 機械英語演習 (西村 正己) 産業図書
 工業英語演習 (下坂 實) 〃
 電気英語演習 (片方 善治) 〃
 初等力学 (森口 繁一) 培風館
 伝熱工学 基礎編 (F.A・ホランド) 〃
 設計計画シリーズ 井上書院
 保養所 (増沢 洵)
 信用金庫 (中善寺・五十嵐)
 建築設計資料集成 8:建築一産業 丸善
 水質工学 基礎編 (合田 健) 〃
 〃 応用編 (〃) 〃
 〃 演習編 (〃) 〃
 基礎振動学 (松平 精) 現代工学社
 伝熱概論 (甲藤 好郎) 養賢堂
 工業英語入門 (A.J. ハーバート) 創元社
 プラトン・レイアウト (高橋 輝男) 建帛社
 作業研究と作業管理 (川島 正治) 日本能率協会
 現場の生産管理技法 (水津 寛一) 産報
 土木工学大系 11:材料工学(3) 彰国社
 構造力学概論 (浅井 貞重) コロナ社
 島地川ダム工事誌
 上水道工学要論 (巽・菅原) 国民科学社
 わかりやすい下水道管きよの実際 (高橋 久) 土木工学社
 一建築家の信條 (前川 國男) 晶文社
 構造物の理論 三次元部材論 (岩下恒雄 等) 実教出版
 鉄筋コンクリートの構造設計入門 (田中 礼治) 相模書房
 最新機械工学シリーズ 7:伝熱工学 森北出版
 伝熱工学入門 (川下 研介) 生産技術センター新社
 超L S I 技術 (垂井康夫 編) オーム社
 発破ハンドブック (工業火薬協会 編) 山海堂
 音楽オーディオ人びと (中野 英男) 音楽之友社
 建築設計実例集 (砂川 幸雄) 南洋堂
 図書館、美術館、博物館、市町村庁舎、
 クラブハウス、市民会館
 DA 住宅II (日本建築協会) 彰国社
 〃 木造I (〃) 〃
 設計製図資料 16 (日本建築学会) 〃
 設計方法IV (〃) 〃
 台所の設計 (〃) 〃
 スペースデザイン (村山克之 編) 技術書院
 工業英語シリーズ 1-4 南雲堂
 建築技術選書 28:建築金物の知識 (立野 一郎) 学芸出版
 法隆寺を支えた木 (西岡・小原) 日本放送出版協会
 3種電験教室、電気機器、材料 (磯部・鈴木) 東京電気大学
 新水道入門 (小林 康彦) 水道産業新聞社
 初級水理学 (川上 栄一) 理工図書
 男の料理 小学館

オレンジ色の焔を追って (石和田四郎) 東京新聞出版

>6 産 業<

古代日本の交通路1~4 (藤岡謙二郎 編) 大明堂
 交通計画 (八十島義之助) 技報堂
 世界の食料需給の現状と問題点 農村統計協会
 病める食糧超大国アメリカ (マーク・クレマー) 家の光協会
 国土はこうして創られた 富民協会
 油濁の海 (田尻 宗昭) 日本評論社

>7 芸 術<

日本古寺美術全集 集英社
 14:醍醐寺と仁和寺・大覚寺
 21:本願寺と知恩院
 原色浮世絵大百科事典3 大修館
 現代日本画家素描集 日本放送出版協会
 16:麻田鷹司
 17:大山忠作
 19:吉田善彦
 20:山本丘人

私の巴里・ジュエリー (朝吹登水子) 文化出版局
 ヒッチコック映画術 (F・トリュフォー) 晶文社
 鮎の川 (伊東阿佐男) 大陸書房
 アメリカ野球ちよつといい話 (R・エンジェル) 未来社

熱い魂 (徳丸 壯也) 文芸春秋
 世界一の青春 (中野 浩一) 講談社
 グレンデで考えたこと (大井 正) サイマル出版
 偏見球談 (阿部 牧郎) 文化出版局
 日本剣豪こぼれ話 (渡辺 誠) 日本文芸社
 剣道講話正眼の文化 (井上 正孝) 講談社
 棒ふりのカフェテラス (岩城 宏之) 文芸春秋
 溝口健二の世界 (佐藤 忠男) 筑摩

ジョンレノン・リブライ (ジョージ・カルボジー) 文化出版会
 滑稽の構造 (田河 水泡) 講談社
 落語と私 (桂 米朝) ポプラ社
 まるく、まあーるく 桂 枝雀
 (廊 正子) サンケイ

>8 語 学<

世界言語概説 上・下(市河三喜 等編) 研究社
 言語学の散歩 (千野 栄一) 大修館
 ことば遊び辞典 (鈴木 棠三) 東京堂
 故事俗信ことわざ大辞典 (尚学図書 編) 小学館
 大言海 新編 (大槻 文彦) 富山房
 角川類語新辞典 (大野・浜西) 角川

チェコ語の入門 (千野 栄一)	白水社	怪しみ (高橋たかこ)	新潮社
岩波 現代用字辞典	岩波	凶学の巢 (森村 誠一)	〃
		弔鐘はるかなり (北方 謙三)	集英社
		イヌワシのように (丸山 健一)	〃
		海を越えた者たち (笹倉 明)	〃
		わが子 リッチー (トーマス・トブソン)	〃
		虹の翼 (吉村 昭)	文芸春秋
		偏見人語 (中山 千夏)	〃
		ライカでグッドバイ (青木富貴子)	〃
		藤沢周平短篇傑作選 (藤沢 周平)	〃
		1: 臍まがり新左	
		2: 父と呼べ	
		3: 冬の潮	
		4: 又蔵の火	
		風のけはい (峰原 緑子)	〃
		いつか汽笛を鳴らして (畑山 博)	〃
		翼あるもの 上・下 (栗本 薫)	〃
		致死連盟 (森村 誠一)	角川
		ヘルメス落ちてくる地獄 (ジョン・バクスター)	〃
		野獣の罨 (伴野 朗)	〃
		エロイカ変奏曲 (三田 誠広)	〃
		漂流 (春名 徹)	〃
		おしゃべり各駅停車 (眉村 卓)	〃
		女王陛下よ永遠なれ (ウイリアム・F・バックリー)	〃
		バカンスは死の匂い (モニック・マディエ)	〃
		クーラー (宇野 輝雄)	〃
		にんげん動物園 (中島 梓)	〃
		時の扉 (辻 邦生)	毎日新聞社
		密謀 上・下 (藤平 周平)	〃
		真紅のセラティア (津本 陽)	中央公論社
		聖母の道化師 (井上ひさし)	〃
		それでも朝はくる 上・下 (森村 桂)	〃
		ぼくたちの冬 (佐藤 節夫)	〃
		さよならの挨拶を (山川 健一)	〃
		ハローマイ・ラブ (高橋三千綱)	〃
		ネフェルティティの微笑 (栗本 薫)	〃
		炎の色 (近藤啓太郎)	〃
		終りに見た街 (山田 太一)	〃
		マイロスト・シティ (村上 春樹)	〃
		あなたの中のさくらたち 上・下 (松田 解子)	新日本出版社
		青い処女地 (佐々木一夫)	〃
		夜霧のナロー (長山 高之)	〃
		聳ゆるマスト (山岸 一章)	〃
		小説電通 (大下 英治)	三一書房
		真夜中の虹 (一色 次郎)	〃
		虚空の影落つ (西村 寿行)	徳間書店
		ベルゴンゾリ施盤 (かんべ むさし)	〃
		遙かに照らせ (眉村 卓)	〃
		復讐には天使の優しさを (ディネーセン・コレクション)	晶文社

- | | | |
|--------------------------------|----------|------------------------------|
| 愛の偏見 (ジョゼフィン・カム) | 晶文社 | 3:わたしの少女時代
(池田・宮城・石垣) |
| やし酒飲み (E・チュッオーラ) | 〃 | 4:映画つくりの実際 (新藤 兼人) |
| こんなふう生きてみた (ディケンズ) | 〃 | 5:東京が燃えた日 (早乙女勝元) |
| めだかの列島 (今井美沙子) | 筑摩 | 6:1945年8月6日 (伊藤 壮) |
| 海を守るたたかい (松下 竜一) | 〃 | 7:鎌倉史跡見学 (沢 寿郎) |
| 征躁曲 (梁 石 目) | 〃 | 8:テレビは変わる (岡村 黎明) |
| 人類の周辺 (今西 錦司) | 〃 | 9:詩のころろを読む (茨木のり子) |
| 原野のまつり (上西 晴治) | 河出書房 | 10:高校生になったら (田代 三良) |
| はじまりは朝 (川西 蘭) | 〃 | 11:カレンダー日本史 (永原慶二編) |
| 裏口は開いていますか? (赤川 次郎) | サンケイ | 12:絵の前に立って (中山 公男) |
| 幻の季節 (眉村 卓) | 主婦の友社 | 13:わが青春のサッカー
(堀江 忠男) |
| 母ふたりの記 (豊田 稔) | 三笠書房 | 14:世界の宗教 (村上 重良) |
| 死体が二つ (佐野 洋) | 実業之日本社 | 15:山と写真 わが青春
(白籬 史朗) |
| 殺意の明王 (荒巻 義雄) | 有楽出版 | 16:平家物語を読む (永積 安明) |
| これが英国ユーモアだ
(ジョージ・ミケシュ) | TBSブリタニカ | 17:きみたちと現代 (宮田 光雄) |
| 私の台所 (沢村 貞子) | 暮しの手帖 | 18:太陽のドラマ (甲斐 敬造) |
| 悪魔の飽食 (森村 誠一) | 光文社 | 19:戦争と沖縄 (池宮城秀意) |
| アレクシスあるいは空しい戦いについて
(ユルスナール) | 白水社 | 20:ぼくとマラソン (宇佐美彰朗) |
| 石ころに語る母たち (小原 徳忠) | 未来社 | 21:小説の読みかた (猪野 謙二) |
| かあさんは魔女じゃない
(ライフ・エスパ・アナセン) | 偕成社 | 22:絵を描くころろ (匠 秀夫) |
| 君は海を見たか (倉本 聡) | 理論社 | 23:考える理科10語 (小野 周) |
| ニューヨークは闇につつまれて
(アーウィン・ショー) | 大和書房 | 24:星座12カ月 (富田 弘一) |
| 恨み黒髪 (滝口 康彦) | 講談社 | 25:漢語の知識 (一海 知義) |
| 坂本竜馬 (豊田 稔) | 学習研究社 | 26:女生徒の進路 (和田 典子) |
| 7つの謎と奇跡 (久保田八郎) | 主婦の友社 | 27:日本の宗教 (村上 重良) |
| 重臣たちの昭和史 上・下
(勝田 龍夫) | 文芸春秋 | 28:定理・法則をのこした人びと
(平田 寛 編) |
| ゴジラ丸船長 浮気めぐり
(宮原 昭夫) | 集英社 | 29:歌舞伎をみる (西山松之助) |
| 歓喜の市 上・下 (立松 和平) | 〃 | 30:私たちと日本語 (藤原 与一) |
| 岩波文庫 | | 31:アインシュタインが考えたこと
(佐藤 文隆) |
| 日本外史 上・中・下 (頼 山陽) | | 32:スポーツ賛歌 (川本 信正) |
| 金枝篇 1~5 (フレイザー) | | 33:ことばの力 (川崎 洋) |
| 岩波新書 | | 34:海と人間 (佐々木忠義) |
| 185:徒然草を読む (永積 安明) | | 35:シェイクスピア物語
(小田島雄志) |
| 186:人間の生と性 (近藤・大島) | | 36:憲法読本 (杉原 泰雄) |
| 187:日本文化史 (家永 三郎) | | 37:化学の基本6法則 (竹内 敬人) |
| 188:働くことの意味 (清水 正徳) | | 38:大学で何を学ぶか (隅谷三喜男) |
| 189:翻訳語成立事情 (柳水 章) | | 39:おーい!数学 (志賀 浩二) |
| 190:現代日本社会と民主主義
(渡辺 洋三) | | 40:ギリシア神話 (中村・中務) |
| 191:関節炎と神経痛 (佐々木智也) | | 41:能力・努力・運 (宮城 音弥) |
| 192:西部開拓史 (猿谷 要) | | 42:法則と定数の事典 (鈴木 皇) |
| 193:小説はいかに書かれたか
(篠田浩一郎) | | 43:奈良の寺々 (太田博太郎) |
| | | 44:カレンダー日本の天気
(高橋浩一郎) |
| 岩波ジュニア新書 | | カラーブックス |
| 1:思春期の生きかた (石田 和男) | | 565:日本の私鉄⑭ 京浜急行 |
| 2:ベートーヴェンの生涯
(山根 銀二) | | 566:身近な薬用植物 |

567：神戸味どころ
 568：日本の私鉄⑮ 京成
 569：健康手帖② こども食事
 570：植物 故事ことわざ
 571：日本の私鉄⑯ 西鉄
 572：新四国巡礼の寺
 573：帆船模型
 環境白書 昭和57年版
 労働白書 昭和57年版
 国土利用白書 昭和57年版
 日本書籍総目録 1982
 六法全書 昭和57年版

就職関係図書

会社要覧 1982 非上場会社版
 〃 1982 [3月版] 全上場会社版
 主要会社 機械就職試験問題 対策と解答
 58年度版 中級公務員試験 合格情報
 高校電気電子就職試験 58年度版
 土木地方国家公務員問題の解説
 機械工学標準問題と解説
 現代人のためのカタカナ用語の知識 最新版
 大学生用面接試験 58年版
 大学卒 常識問題 1983
 大学卒 面接作文 1983
 58年版 国鉄職員試験問題 傾向と対策
 公務員採用試験全書 1982
 最新電々公社員試験 1983
 これだけは知っておきたい 機械の基礎問題
 機械工学演習
 就職 受験 時事社会常識試験 1983
 就職試験 機械工学 金属工学科 58年度版
 理工学部 就職試験 58年度版
 大学 短大卒程度 教養試験問題 58年版
 大学 短大卒程度 一般知能試験 58年版
 大学生の就職英語 これだけはやっとう58年版
 58年版 精解中級国家公務員試験傾向と対策
 国家試験資格試験全書 1982

寄贈

みんな豊かに (柏原 学)
 筑波大学建築図集 筑波大学

